

「世界遺産」登録へ向けて

『阿蘇―火山との共生とその文化的景観』

先月号は世界遺産の概要と現在の状況をお知らせしましたが、今月号は昨年9月27日に提出した「阿蘇―火山との共生とその文化的景観」の提案書の基本コンセプトを説明します。

今回の提案を構成する資産（文化財）は、2万2千haにも及ぶ日本一広大な草原景観、直接覗くことができる稀有な噴火口の中岳火口、信仰の証となる阿蘇神社、収穫の米を積み上げたとの神話が伝わる米塚、阿蘇開発の指導者を祀る中通古墳群、阿蘇谷と外界とを結ぶ豊後街道の6つになります。これらの各資産は人と自然との共生で一体を成しており、全体が壮大な「文化的景観」であるといえます。

テーマは「人と自然との共生」

阿蘇の提案内容のポイントは以下のとおりです。

約27万年前から約9万年前まで盛んな火山活動を繰り返し、4回にわたる大規模な火山活動によって世界最大級の巨大な陥没カルデラが形成された。

3度の湖時代を経て、少なくとも6千年前ほど前に陸地化したことにより、カルデラ内の広大な平野が人々の暮らしの舞台として幕が開けた。

現在も活発な活動を続ける中岳火口は、古くから信仰の対象となった。それだけではなく人々は活火山でなおかつ高冷地という過酷な自然環境に向き合い、先人の努力と英知のもとに巧みな開発を行い、阿蘇ならではの多様な文化が育まれてきた。

独特な火山地形であるカルデラの中に5万人もの人々が暮らし、古来より人々の生業と共に広大な草原が維持されてきた。その副産物として希少動植物が生息する良好な自然環境を作り出している。また、阿蘇は豊富な湧水群に象徴される巨大な水源涵養地。九州の水がめであるほか、温泉などの自然の恵みも受け、自然との絶妙なバランスのもとに共生している。



▲ 阿蘇神社



▲ 中岳火口



▲ 草原景観



▲ 豊後街道



▲ 中通古墳群



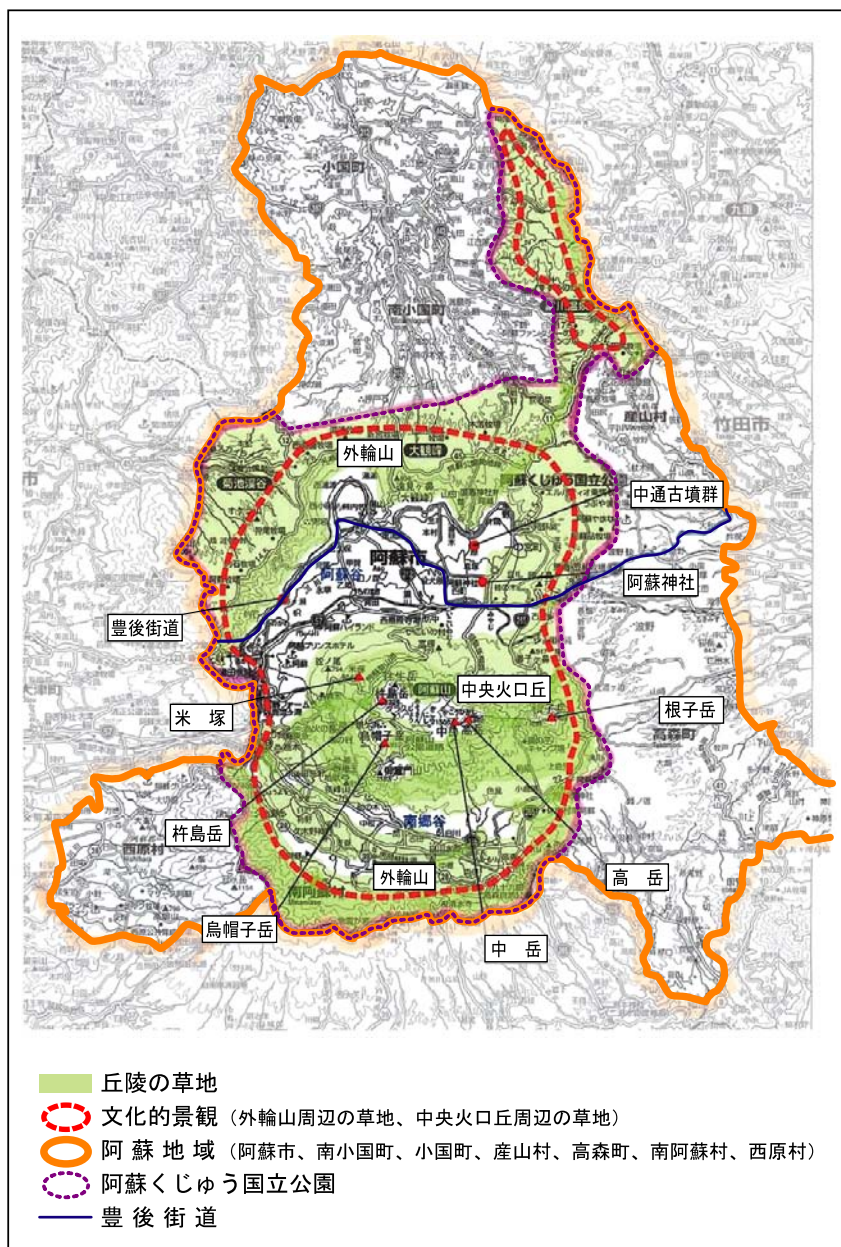
▲ 米塚

このように、古来より人々の手により維持されてきた阿蘇の草原や、そこに営まれた阿蘇独自の文化は世界にも例のない「自然と人間の共同作品」であり、まさに『人類共通のたからもの』です。その反面で適切に保全しなければ、やがて消滅を免れないかけがえのない存在でもあります。『人類共通のたからもの』という世界的な保護の視点に立ち、私たちが、いかにして自然と共存していくかという未来を考える上で、他とない文化遺産といえます。

阿蘇の草原を未来へと引き継ぐ

近年の社会の変化などから、地域住民のみで草

原を維持することは難しくなっています。このような危機的な状況の中、(財)阿蘇グリーンストックでは、野焼きボランティアなど様々な草原維持活動をいち早く展開してきました。さらに環境省も自然再生法に基づき、「阿蘇草原再生協議会」という大きなプロジェクトを開始させています。この協議会は行政や民間、牧野組合などが共通の認識を持って連携を図り、持続的な草原利用と草原環境の保全を目的としています。このように、草原維持・保全の活動と世界文化遺産登録の推進とは、「草原を守る」という同じ目的を持っています。今後、協力・連携を行うことにより、双方の活動に大きな力となることが期待されます。



阿蘇は世界でも類例のない地域

火山に由来する世界遺産の類例のほとんどは自然遺産であり、火山そのものの活動や特異な地形などが評価されています。文化遺産では、イタリアの「ポンペイ」などのように埋没遺跡や火山島が舞台となった人間の営為が評価されているため、阿蘇とはコンセプトが異なっています。

また、既に暫定リストに掲載されている「富士山」は、標高3776mの極めて秀麗な山容を持つことから日本を象徴する名山であり、信仰と芸術・文学の諸活動に関連する文化的景観がテーマとなっています。対する阿蘇は現在も活動する火山のもとに人々が暮らし、人々の営みとそれにより形成された文化的景観が主たるテーマであるため独自性があります。

構成資産を国指定文化財へ

世界文化遺産の登録条件として、構成資産は文化財保護法により保護されている国指定以上の文化財であることや、その資産(コア)を保護するために周囲に景観保全などの配慮が必要な区域(バッファゾーン)を設定することになります。

阿蘇における構成資産の現状は、阿蘇神社のみが国の重要文化財に指定されています。今後、草原を重要文化的景観へ選定することや米塚などの国指定化を進め、文化財保護の推進を図ることが世界文化遺産登録推進へと繋がっていくのではないかと考えられます。

お問い合わせやご意見は

教育委員会 社会教育係 世界遺産担当まで

223229 E-mail: kyouiku@city.aso.lg.jp